

コンピュータを用いた TOEIC 模擬試験の実施

弘前大学 人文学部 内海 淳

utsumi@cc.hirosaki-u.ac.jp

0 始めに

現在、多くの大学で、学生の英語能力を客観的に評価するための取り組みが行われている。このような取り組みの代表的なものの一つが、TOEIC を成績評価に導入することである。しかし、TOEIC を、そのまま、大学での学生の英語能力評価に取り入れることにはいくつかの問題点がある。本発表では、コンピュータを利用した TOEIC の模擬試験を行う事によってその問題点を解決する弘前大学の試みを紹介する。

1.1 客観的指標の必要性

弘前大学のような国立大学の新入生の多くは、センター入試の一部という形で英語の統一テストを受けてきているが、推薦入学者の大半は、これを受験していない。また、入学以後の英語教育では、個々のクラス担当の教員が学生の能力評価を行うため、統一した指標で学生の英語能力を評価・調査するシステムが存在していない。そのため、学生の英語能力が、入学以後、どれだけ向上したか、あるいは、低下したかを判断できないのが現状である。また、多くの学生は、入学一年目で、必修の英語教育を終了してしまうため、卒業時までの英語能力の推移に関するデータも存在していない。

これに対して、大学外からは、卒業時の英語能力を重視することが求められている。大学の英語教育教育に対する、こういった外部からの評価・要求が増加している。これに対応するためには、学生の英語能力の実態と卒業時までのその能力の推移を、客観的で統一された指標のもとで調査し、それを大学の英語教育にフィードバックする体制を作る必要がある。

1.2 TOEIC

このような客観的で統一された指標の一つとして、多くの大学で採用されているのが TOEIC である。しかし、TOEIC の評価・判定を大学での成績判定に利用することは、学部や学科といった比較的小規模の単位で行われており、規模の大きい大学が全学規模で導入して入れる事例はほとんどない。また、学生の英語能力の推移を、毎年年次ごとに、調査するような形の利用の事例もほとんど存在しない。これには、以下のような理由が考えられる。

1.2.1 学生側のコスト

TOEIC は外部機関が実施するテストであるので、

受験費用が発生する。受験者一人当たりにつき TOEIC 公開試験で約 6000 円、比較的安価な TOEIC-IP 試験でも約 3000 円以上を負担しなければならない。大学が TOEIC の成績評価を利用する場合でも、ほとんど、受験者である学生自身がこの受験料を負担することになる。このような状態では、学生に毎年 TOEIC を受験することを要求することは困難である。

1.2.2 大学側のコスト

大学が、組織的に TOEIC を成績評価に利用する場合は、試験会場の提供や試験監督の実施という形で協力しなければならない。TOEIC 公開試験や TOEIC-IP 試験では、ほとんど入学試験と同じ程度の実施人員・実施会場の提供・整備が求められる。一学年の定員が 200 人程度の学部でも、全員に TOEIC を受験させる場合には、大学の教員・職員にとってかなりの負担になる。したがって、一学年の定員が 1000 人を超す大学が、全学単位で、定期的に、学生に TOEIC を受験させることは困難である。

2. コンピュータを用いた TOEIC 模擬試験

弘前大学では、以上のような問題点を回避しながら、所属する全学生の英語能力の推移を調査するために、2005 年度、コンピュータを用いたオンラインの TOEIC 模擬試験システムを導入した。

2.1 TOEIC 模擬試験システムの概要

TOEIC 模擬試験システムは、教材配信システムとして WebClass¹を採用している。WebClass を採用したのは、今後、学内の教育用コンピュータ環境が大幅に変更されても問題が生じないように、Windows の様な、特定の OS の機能に依存せずに、任意のウェブブラウザで受験できるようにするためである。

試験問題は、アルク社の作成した TOEIC 模擬試験のコンテンツを採用している。正式な TOEIC は、200 問の問題を 2 時間かけて解答するのに対し、この模擬試験では、100 問を 1 時間で解答する。

WebClass の稼働するサーバは、受験者が大学構内にある約 600 台の教育用 PC を利用して受験する場合を想定して、最大 600 人が同時に受験しても大丈夫なように、メインサーバ 1 台、負荷分散サーバ 2 台の構成でシステムを構築している。

2.2 カンニング等への対策

弘前大学の全学生数は、約 6000 人であるので、学内の教育用 PC600 台をフル稼働させ、授業の時間割と同じ時間帯を使用して、1 日 5 回、試験を実施すれば、2 日で、全学生を受験させることが可能である。しかし、実際には、学部・学科・年次等に基づいたスケジュールの調整や、機器の故障等を考慮に入れなければならないため、全学生を受験させるには、3～4 日程必要になる。同一の問題を使用して、試験を実施する場合には、この複数の日にまたがるのが、カンニングを誘発する可能性がある。同時に、試験監督も極力少人数にする場合には、近接する席の間でのカンニングも問題になると考えられる。このようなカンニングを難しくするため、問題の提示順序や、選択肢の順序を自動的に入れ替えることが可能になっている。

3 TOEIC 模擬試験の実施

上述のようなシステムを導入し、2005 年度、TOEIC 模擬試験を複数回実施したが、導入の初年度ということもあり、各学部・学科との調整が十分でなく、一部の学部を対象にして実施せざるをえなかった。ただし、これ以外の全学生に対しては、自分の都合の良い時間に各自自主的に受験するように呼びかけた。

2005 年度に、この TOEIC 模擬試験を受験した学生の内訳は以下の表の通りである。

入学 年	農 生	人 文	医 学	教 育	理 工	大 学 院	計
1998			1				1
2000				1	2		3
2001	1						1
2002	2	4	5	3			14
2003	5	13	6	2	8	2	36
2004	2	11	1	1	6		21
2005	20	74	18	26	20	3	161
計	30	102	31	33	36	5	237

実際に TOEIC 模擬試験を実施した結果、いくつかの問題点が明らかになった。

3.1 技術的なトラブル

技術的なトラブルとして、教育用 PC の設定に関するものがあげられる。TOEIC 模擬試験の半分は、リスニングの設問であるが、教育用 PC の音声出力の設定が、端末毎に異なっていて、受験者がそのことに気が付かず、調整に手間取ることがしばしば起こった。

これに関しては、受験の開始前に、繰り返し注意を喚起することにより、2 回目以降はかなり少なくなった。

また、受験はしたが、最後までやり遂げない学生が約 20% 近くいた。これは、特に、自主的に受験した学生の中に特に多く、さらに、リスニングの設問が始まって早々に止めてしまう受験者が多かったことから考えると、上述のトラブルによって途中で断念したということが考えられる。

3.2 受験者の少なさ

より深刻な問題は、TOEIC 模擬試験の受験者数が少ないことである。TOEIC 模擬試験を、英語の科目の履修要件に組み込み、半ば強制的に受験を義務づけたグループでも、受験率は 60% 強に留まっている。そのような、条件を課していない学生で受験した者は全体の 2% 程度である。

しかし、このような状況は、TOEIC 模擬試験だけに限った事ではない。弘前大学で導入しているオンラインの英語自習システムも、授業内で半ば強制的に利用させている学生を除くと、その利用率は全学生の 1% にも満たない。

4 最後に

TOEIC 模擬試験や英語自習システムのようなオンライン教材を継続的に利用させるためには、全学的な取り組みの中で、利用をある程度義務づけるような方策を講じなければならない。しかし、特定の授業科目の単位や履修に関連付けるような対策では、その場限りの利用は増加するかもしれないが、継続的な利用には結びつかない。TOEIC 模擬試験のようなプログラムを継続的に利用させ、具体的な形で成果を上げるためには、現行の大学の規則やシステムの中に、いかに有機的な形で組み込めるかが焦点になってくる。

¹株式会社ウェブクラス: <http://www.webclass.jp/>